

黒ねこ作

Illust. 笹目めと

Sweet  
Love

スイート  
ラブ

放課後

Houkago

甘やか同棲生活

カスサと始める

Blue Archive FANBOOK



Blue Archive FANBOOK

**放課後スイートラブ**  
**カズサと始める甘やか同棲生活**

---

黒ねこ作

表紙・挿絵/笹目めと

## 登場人物紹介

### Characters

#### 杏山カズサ トリニティ総合学園 1年生 放課後スイーツ部

放課後スイーツ部の部員。ゆったりした静かな性格で、先生の仕事をシャーレの一員として日々手伝っている。スイーツに目がなく、特にマカロンと苺系のスイーツが好き。過労気味な先生を内心で心配している。

#### 先生

##### 連邦捜査部シャーレ 担当顧問

キヴォトスで希少な大人の男性。推定年齢は二十代後半。全ての生徒の味方として、仕事漬けの日々を送っている。仕事を手伝ってくれる早瀬ユウカに頭が上がらない。

#### 柚鳥ナツ トリニティ総合学園 1年生 放課後スイーツ部部長

放課後スイーツ部の部長。トラブルメーカーの筆頭であり自称ロマンチスト。何かとスイーツに喩えて、妙に哲学的なことを言う癖があるものの、本質的な部分を突く勘の良い女の子。

#### 伊原木ヨシミ トリニティ総合学園 1年生 放課後スイーツ部

放課後スイーツ部の部員。子供扱いされるのが嫌いで、自分の体型と身長にコンプレックスを持っている子供っぽい女の子。

#### 栗村アイリ トリニティ総合学園 1年生 放課後スイーツ部

放課後スイーツ部の部員。友達とスイーツを食べながらお喋りをする時間を大切にしている。好物はチョコミントアイス。



プロローグ .....	005
第一話 先生の彼女になってあげよっか？ カズサのお試し彼女編 .....	024
第二話 ヌガーのような恋をして 前編 .....	050
第三話 ヌガーのような恋をして 後編 .....	098
第四話 放課後スイートラブ .....	134
エピソード .....	162
あとがき .....	168

## プロローグ

「ん？ ああ、先生。おかえりなさい」

残業を終えて帰宅した私をリビングで出迎えてくれたのは、猫耳少女の微笑みだった。

「た、ただいま。カズサ……」

ふらふらした足取りでソファーまで辿り着くと、上着を脱ぐのも後回しで倒れるように座り込んだ。疲労感がどっと押し寄せてくる。もうここから一步も動きたくない……。

「お疲れ、先生。大丈夫？」

「……なんとかね」

私はそう答えながら、カズサに小さな白い箱を手渡した。

「はい。ちゃんと頼まれたスイーツは買って来たよ」

数量限定のイチゴケーキ。どうにか売り切れ間際で手に入れることができた。カズサの赤みがかかった瞳が丸くなる。

「え、本当に買って来てくれたの？」

「うん。食べたかったでしょ」

「……それはそうだけど。なんて言うか、その……ありがとう、先生」

彼女が照れくさそうな顔ではにかむ。私はその表情が見ただけで満足だった。  
けだる  
気怠い身体に鞭を打ち、足下に置いた鞆からノートパソコンを出した。

「……先生、まだ仕事するんだ」

「うん。やらなきゃいけない書類が溜まってて……」

仕事はいつでも山積みだった。それでも生徒のためなら労力は惜しまないし、まったく苦にならない。ただそうは言っても、やはり疲労やストレスは溜まってしまふ。

「先生、頑張りすぎ。ちょっとは休んだら？」

彼女が呆れたような表情で右隣に座った。

「こっち向いて、先生」

言われるがまま振り向くと、彼女にぎゅっと頭を抱きしめられる。

「どう？ ちょっとは気が休まりそう？」

むにゆりと豊かなおっぱいの抱擁ほうようで顔を包まれる。もちもちの柔らかい感触と温もりは心地よくて、女の子の良い匂いがした。いけない行為だとわかっていても抗えない。

カズサが後ろ頭をそっと撫でてくれた。

「いいよ。私にたくさん甘えて、せんせっ♥」

「うう、カズサ……」

優しいささやき声に促され、私は我慢できず彼女に抱きついた。

「ん、好きなだけこうしていいから。今日も頑張ったご褒美ってことで」

小さな子を甘やかすような手つきと声。大の男が情けないと思う反面、彼女の温もりと母性をもっと感じてみたい。安らいだ心の中でそんな男の要求を意識してしまう。

もっとも、美少女に抱き締められて意識しない男もいないだろう。

ピンク色のインナーカラーを入れたショートヘアの黒髪と、きめ細かな白い肌にすっと通った目鼻立ち。スタイルもよく、雑誌のモデルにもなれそうな美少女だ。

そんな彼女が安らいだ表情でより密着してくる。

「こういうのって、なんて表現したら良いのかな……けど、うん。悪くないね」

押し当てられるおっぱいの柔らかさと体温。ちょっと息を吸うだけでも、彼女の香りに本能を刺激される。教師が生徒に向けるべきではない邪な欲望が膨らんでしまう。

（う、これはちょっとまずいかも……）

カズサが耳元でくすつと笑う。

「先生？ 隠そうとしてるけど当たってるよ？」

このままだとまた流されてしまう。今すぐ離れるべきだとわかっている。でも――。

「ほら、ここ……」

身体を離れた彼女が片手を伸ばし、ズボンの股間で膨らむ雄の欲望に指を這わせた。手のひらで布越しの勃起竿をすりすりと擦られる。

「あ、うっ。カズサ……」

「今日は先にしちやおっか」

目の前で膝をついた彼女は、私のズボンを脱がせようとベルトに手をかける。

「カズサ。やっぱりこういうのは……」

「先生が嫌なら止めるけど……この状態で仕事できそう？」

ここで止められたら生殺しもいいところだ。はつきり言って集中できない。

私のなけなしの理性は男の本能という圧倒的な欲望を前にあっさり和白旗をあげる。

「……ごめん。お願いしてもいい？」

「うん、おっけ。たっぷり気持ちよくしてあげるから♡」

彼女が止めていた手を動かし、私のズボンとパンツを一緒に下ろした。ぶるんと窮屈な空間から解放された肉棒が跳ね起きる。脈動する雄茎を指先でなぞり、

「もうガチガチじゃん。じゃあ、最初はこんな風に……」

カズサの細い指が肉竿を掴み、ゆっくりと幹を擦ってきた。

「うあ……」

ダイレクトな刺激に反応すると、彼女はゆるゆると陰茎をしごき始める。

「シッコシッコ、シッコシッコ♡ 先生、どう？ 気持ちいい？」

「……気持ちいい」



「よかった。じゃ最初はゆっくりするね」

そう言つて、柔らかい手のひらで肉棒を丹念に愛撫しながら往復する。

「シコシコ、シコシコっ♥ 先生のおちんちん、私の手の中でビクビクって嬉しそうに震えてる……手コキつて言うの？ そんなに気持ちいいんだ？」

カズサは指輪つかで揉みほぐすように肉棒を擦り上げる。

優しい手コキの刺激は、緩やかな波となつて私に快感を与えてきていた。

「あ、おちんちんの先からえっちなお汁が出てきたね♥ じゃ今度は、あーむっ……」

肉棒を擦る彼女が口を開け、ぱくりと亀頭を咥え込む。さらに亀頭全体を濡らすように舌を動かし、ざらついた表面で敏感なエラや裏スジを丁寧に舐め回した。

「ちゅぶっ……んう……れるっ……あむっ、ちゅ、じゅずずっ、じゅるっ……」

与えられる強い快楽に反応した肉棒がビクンと跳ねる。

「あ、うくっ、カズサ……」

手のひらとはまた違った気持ちよさ。まるで生き物のごとく亀頭を這いずり回る舌が、ぐるぐると円を描きながら、カウパーをねだるように鈴口をほじくってくる。

「んっ……れるっ、じゅぶ、じゅるるっ……ちゅぼっ……先生の腰、すっごい震えてる。もうちよつと濡らしてあげるから、ちよつと動きを速くするね」

彼女が口をモゴモゴと動かす。それから先端を見下ろして薄桃色の唇を開いた。

——とろお……ぴちゃっつ。

とろりと水飴じみた唾液が亀頭を覆うように舌先から滴る。

教え子の淫らな姿に興奮する私を見上げ、カズサはべろつと上唇を舐めた。

「先生の大好きなぬるぬる手コキ♥ さつきより滑りもよくなつて……くちゆくちゆつて、えっちな音が聞こえてきたね。シコシコ、シコシコっ♥」

「う、ああっ……カズサそれっ!」

「気持ちいい? いいよ、先生。もつと気持ちよくなつて♥」

彼女が肉棒をしごく手を速くした。我慢汁と唾液が混ざり合い、にちゃにちゃと淫猥な音を立てながら、雄茎を擦り上げるピストン運動をどんどんスムーズにしていく。

カズサは亀頭を啜えてしゃぶる。最も敏感なところを口内でもてあそばされた。

「ちゅぶっ……れろ、じゅぶじゅぶっ……ちゆるっ……ちゅぶっ……」

カリ首に舌を巻きつけ、ゆっくりとした摩擦を繰り返す。背筋にゾクゾクとした快感が走った。くすぐつたいような、切なくもどかしい刺激が射精感をあおってくる。

「うう……はあっ……」

ぐつぐつと煮えたぎる塊が腰の奥からせり上がってきた。

「れろっ、れるれるっ……んあ、先っぱが膨らんできた。イっちゃいそう?」

「……うん、そろそろ出そう」

「じゃ、ラストスパートかけていくよ。あーむっ♥」

ぐちゅぐちゅと水音に合わせ、リズムカルな手コキの速度が増した。

カズサは唇をすぼめて、より激しく亀頭に吸いついた。

「じゅぶっ、じゅずずずずっ……ちゅ、あむっ……ちゅぶ、じゅるるっ……」

「うああ……」

激しいバキュームと這うような舌の動き。手首にも捻りを加えて、ただの上下運動とは違った刺激を与えてくる。さらに空いた左手でパンパンに張り詰めた玉袋をほぐす。

痺れるような切ない快楽が、舌と手による絶頂の追い込みに拍車をかける。

「あっ！ カズサ、それヤバっ！」

あまりの気持ちよさに思わず声が漏れ、爆発間近の射精感で腰が勝手に震え出す。

「あむっ、れるっ……んっ、ちゅっ……もう出ちやいそう？ いいよ、射精して。先生のこっ तरीせーし、口で受け止めてあげるから。好きなきときに射精していいよ♥」

カズサはペニスを握る手を素早く何度も往復させる。最後の一押しと言うように先端を口に含むと、顔を前後に動かしてエラをしごき、舌でねっとりと裏スジを舐めた。

「じゅぶぶぶぶっ！ ちゅう、じゅるっ……ちろろっ、じゅぶっ、じゅぶぶっ！」

「あっ、ああっ！ 待つ、それ気持ちよくてもうっ……！」

「ちゅぶちゅぶっ、れるっ……いいよ、らして♥ せんせっ、せーしらしてっ♥」

「うあぁっ！ 出る！ もう出るっ……………」

辜丸を駆け上がる快感に身を任せ、私はカズサの口内で思いつき射精した。

——びゆるるっ！ どびゅっ！ びゆくんびゆくんっ！ どびゆるるるる〜！

「ふぁ……………すごい、たくさん出てる……………」♥

勢いよく吐き出される白濁液を、カズサが舌で受け止めてくれる。温かい口内で肉棒が何度も脈打つ。ただ手でされるより何倍も気持ちよくて幸福感のある射精だ。

彼女は肉棒を根元まで咥えると、緩やかなフェラで一滴も残さず精子を吸い出す。

「じゆるっ……………れる、ちゅぶ、じゅずず……………」

嚙下を何度か繰り返し、ゆっくりと口からペニスを抜いた。

口端から垂れた精液も指先で拭い、生クリームを舐めるように味わう。

「ん、ゴちそうさま。すっごく濃いのが出たね、先生♥」

自分の精液を恍惚とした顔で舐める教え子は淫らで美しく、私は愛おしさと強い情欲に駆られた。カズサを今すぐ抱きたい。自分だけの女にしたい——。

ほんのりと頬を上気させたカズサが、潤んだ瞳で上目遣いに見つめてくる。

「先生……………これで終わり、じゃないよね？」

彼女はねだるように再び硬くなっている肉棒をゆるゆると擦ってくる。

本当はまづいとわかつている。でも、ここまできたらお互いに欲望を止められない。

「もちろん。カズサも我慢できないでしょ？」

「それは……そう、なんだけど……」

「おいで。カズサ」

彼女を膝の上に座らせ、身体を支えるように抱き止めた。

カズサは気恥ずかしさを隠そうとしながら訊いてくる。

「も、もしかして、最初から気づいてた……?」

「なんとなくね。今日はずつとすれ違いだったから」

「そっか……まあ気づいてないわけが無いよね……」

取り繕うのは無駄と悟ったらしく、甘えるように密着してきた。

「先生? キス、してもいい?」

私は答える代わりに、彼女の頬に手を添えて唇を奪う。

「んっ……」

柔らかな唇を食むように愛撫し、わずかな隙間から舌を入れた。彼女は戸惑いながらもそれを受け入れる。口内を味わうようにゆっくりとなぞり、お互いの舌を絡め合う。

ゆっくり顔を離すと、透明な唾液が糸を引いた。

「もう……先生、がつつきすぎ……」

くすつと笑う彼女が、衣服をはだけていく。お気に入りの黒いパーカーとセーラー服の上を脱ぎ捨てると、背中に両手を回してブラのホックを外す。

ふるんつ、と揺れるたわわな果実が、私の目の前を埋め尽くした。

「触っていいよ、先生♥」

我慢なんてもちろんできない。私は左右の乳房を下からすくうように揉む。

「んあっ♥ あっ、んんっ……どうかな？ あんまり大きくないけど……」

「そんなことないよ。このままずっと触ってたいくらい」

すべすべの白い肌が手のひらに吸いついてくる。マシユマロよりも柔らかいおっぱいの感触を夢中で楽しむ。いくら揉んでも飽きない、男を虜とりこにする魅惑の心地よさだ。

「あっ、んうっ……」

彼女の色っぽい吐息で首筋をくすぐられ、より興奮を掻き立てられる。

やがて乳首がぷつくりと勃起してきた。親指でそれを優しくこねると、カズサの身体がビクビクと小刻みに震え、漏れる喘ぎ声にはつきりと快感の色が滲にじみ始める。

「……ん、あっ、せんせっ♥そこは、ふあっ、んくうっ……」

親指と人差し指で挟んだ乳頭をこりこりとマッサージ。彼女が背中をのけ反らせた。

「ひゃあっ♥ あっ、んんっ、ふあっ……」

右手で愛撫を続けつつ、私は柔肌にむしやぶりつく。

「んあっ♥ ちょ先生、待っ……それ、やあ、だめえっ♥」

硬くなった乳首を吸うと、カズサは可愛らしい声で反応する。舌先でちろちろと乳頭を舐め転がされるだけでも気持ちいいのだろう。彼女の身体が何度も小さく跳ねた。

「あふ、んああっ♥ ん、せんせっ……♥」

とろけた表情で彼女が腰を揺する。さらに深い快楽を求めのおねだりだ。

「カズサ？ そろそろ欲しくなってきた？」

こくりと恥ずかしそうに頷く彼女が、ストッキングとパンツを脱いだ。

「触るよ？」

そう尋ねてから、私は彼女の股間に手を這わせる。

秘裂はもう、前戯の必要がないほど愛液でぬるぬるになっていた。

「ん、ああ……んんっ♥」

「カズサのここ、もうすっかりびしょびしょだ」

「い、言わなくていいから！ 恥ずかしいじゃん……」

私は苦笑しながら、陰毛のないつるりとした割れ目を中指でなぞる。

本来なら触れることを許されない少女の聖域。そこを焦らすように何度も往復した。

「んっ、はっ、んあっ、あっ、あっ♥ ん、先生のもまた大きくなって……んくう」

彼女の指摘通り、ペニスはもう痛いほど硬く反り返っている。

「……カズサが欲しくてこうなってるんだよ」

勃起した肉棒を手で握り、とろりと蜜の溢れる股間——陰唇をなぞる。

「ん、ひうつ!? んあぁっ♥ んう、先生の熱くて……とっても、硬くて……んっ♥」

ペニスと秘唇が擦れるたび、カズサは切なげな溜息をこぼし、自ら腰を揺する。

「カズサのおまんこも、すぐく熱いよ」

そう答えながら、秘裂をかき分けるように肉棒を擦りつけると、ぬちゅぬちゅと卑猥な水音が響く。姫穴の奥から垂れる愛液が、潤滑油のごとく滑りを良くする。

目を向ければ、白く泡立った愛液が肉竿との間にいやらしく滑りを良くしていた。

ときおり硬くなった秘豆に当たると、彼女がびくっ、びくっとお尻を跳ねさせる。

「はぁ、はぁ……んっ、ひぐっ♥ も、もういいから先生……」

彼女の言いたいことはわかっている。でも、ちゃんと言葉にしてほしくて、私はあえて気がつかないフリをした。

「ん? もういいの?」

「わかってるくせに……先生のいじわる」

ちよっと拗ねたような口調で言うと、私を軽く睨んでくる。

「カズサが可愛いからついね。ほら、どうしてほしいか言っくらん?」



羞恥心よりも欲望が上回ったようで、彼女はスカートの裾をめくり上げ、私の視線から逃れるように目を逸らした。

「……私のここに……先生のおちんちんを入れて、欲しい……」

クールな美少女が、一番恥ずかしいところを露わに自らペニスをねだっている。

可愛い生徒の見せる淫らな姿と、自分を求めてくれているという喜びで、興奮と性欲が一気に掻き立てられた。

肉棒を秘所にあてがうと、カズサは期待した表情で腰を浮かせる。

「……わかった。カズサ、入れるよ?」

返事を待っている余裕はなかった。彼女の腰を押さえて、ぴったりと閉じている陰唇をこじ開けるようにペニスを差し込んでいった。

「あ……ひうつ、んくつ、先生の入って……くるっ……♥」

亀頭が膣口を広げながら、にゅぷりと蜜壺に埋もれていく。

まとわりつく柔髪やわひだが肉棒を迎えた。最初の頃のキツさはない。

今は締めつけながらも、悦んで私のものを深くまで啜えこんでいく。

「ん、あぁっ……私の奥に、当たって……あ、あっ、んんうつ、はぁぁ……」

腰を下ろしたカズサが、私に抱きついてより密着した。

「……んっ、全部入った。気持ちいい?」

「カズサの中、すごく熱くて気持ちいい……」

熱く湿った膣内はぬるぬるで、人肌の風呂に浸かっているような心地よさがある。カズサはうつとりした表情で満足そうに微笑んだ。

「よかった。じゃ私が動くから……いっぱい気持ちよくなつてね、先生♥」

膣道がきゅうつと締まる。肉褻がうねるような蠕動ぜんどうで肉棒を擦ってきた。

彼女が腰をゆつくりと引き、半分ほど抜いたペニスを再び沈めた。

「あ♥♥ んんああ♥、ふあ♥……あ♥、んくう……」

じゅぷつ、じゅぷつと卑猥な音を立てて、腰を前後にグラインドさせる。

肉棒全体で膣壁をごりごりと擦り、彼女の中を往復していく。

「……ん♥、あ♥、んくう♥♥ 私のおまんこの、一番深いところまで、んはあ、ああ♥、たくさん擦れて……ひう、あ、ん♥♥」

今まで散々焦らされた仕返しか、カズサは容赦なく腰を振って肉棒を責めてきた。

「んく♥♥ あ♥、んはあ、やば♥、いい……先生のおちんちん、気持ちいい♥……♥」

ぎゅうぎゅうと搾り取るように雄茎を締めつけてくる。

「う、カズサっ！ あんまり締めつけると……」

「ん♥、あ、ああん♥……せんせ♥♥ 私でたくさん気持ちよくなつて♥♥」

気がつくくと、私は本能に任せて腰を動かしていた。

彼女のピストンに合わせ、おまんこの奥に何度も肉棒を突き立てる。

「ひゃうっ!? あっ、ああっ♥ せんせっ、んくうっ……そんなに激しくされたらっ！  
すぐにイっちゃ……あっ、ひああっ♥」

「いいよ。好きなときにイっていいから」

ほっそりした身体を抱きしめて、私は揺れているおっぱいにむしゃぶりつく。

ぴんと勃っている乳首を吸い、コリコリした乳頭を甘噛みした。

「ひああっ♥ 待つ、先生だめっ、そこ弱いから、だめだめっ♥ あっ、んああっ！」

きゆうっと絡みつく肉壁の締めつけが増す。そろそろ絶頂が近いのだろう。

彼女のエロい艶姿あですがたと喘ぎ声、そして精液を搾りとりとうとするおまんこの気持ち良さで、

睾丸がムズムズする。さっき出したばかりなのにもう射精衝動が高まっている。

「ん、あっ、あああんっ♥ 先生の、気持ちよすぎっ、もう、もうだめえっ……♥」

肉感たっぷりな彼女のお尻を押さえて、ピストンする速さを上げた。

「あっ、ああっ♥ 先生やだっ、もうイっちゃうからあ、だめ、やつ、ふああ……♥」

目尻に涙を浮かべて、嫌々するように頭を振って訴える。

膣内がうねり、汗ばんだ全身を小刻みに震わせ、その顔はすっかり蕩とろけきつっている。

いつ絶頂してもおかしくないのに、カズサは与えられる快感へ抗っていた。

「我慢しないでいいよ、カズサ」

私は性欲を叩きつけるような抽送ちゆうそうを繰り返す。やや浅く引いてから一気に入れる。

「~~~~~♡」

声にならない喘ぎを漏らし、ぐつと背中をのけ反らせて全身を震わせる。

それでもイク寸前で踏み止まる。私は軽く驚くと共に彼女が耐える理由が気になった。

「どうしたの？ 気持ちよくない？」

彼女が甘えるように縋すがりついてくる。呼吸を荒げながら耳元で答えた。

「はあ、はあ……せんせいと、いっしょがいい……せんせいのせーし……全部、わたしの  
中で受け止めるからあ……」

なるほど。そういうことだったのか。

彼女の求めてくれる気持ちは嬉しいし、そういうところが可愛いと心から思う。

「……カズサ、本気でいくよう？」

そう告げると、私は彼女の想いに応えるべく、自分の快楽を優先した動きに変える。

蜜壺を掻き回すように腰を揺すり、肉棒を腠肉ひだの襞ひだでしごいた。

「うっ♡ あっ、あっ、い、いくっ、イっちゃっ……せんせ、はやくう……あっ♡ あっ、  
んはあああっ♡」

白く泡立った愛液が大量に溢れてくる。ぐちゅぐちゅと淫らな水音が部屋に響いた。

甘く切ない快感で睾丸が痺れる。限界が近づいている証拠だった。

「んあぁっ、あっ、おちんちん大きくなってきたぁ♥ せんせっ、だしてっ♥ わたしのおまんこでびゅっって、どろどろのせーしだしていいよっ♥」

耳元でささやかれるエッチな言葉がさらに興奮をあおる。

止めようのない射精感が大きな快楽をともなって急速に上ってきた。

「カズサっ！ そろそろ出すよっ……！」

「ふああぁっ♥ わたしも、もうイクッ、イツちゃっ、あっ♥ あああああくっ♥」

絶頂したカズサが、全身を痙攣させ、しがみつくように私へ抱きついてきた。収縮した膣内はペニスを強く締めつけ、精液を求める肉壁が舐るように擦り上げる。

「はぁ、はぁ、カズサ……イクよ、もう、イクっ!!」

子宮口をめがけて突き上げると同時に、私は欲望のほどばしりをぶつけた。

——びゅるるうっ！ どくどくどくっ！ ぶびゆるるうっ！ どびゅどびゅっ！

「ん、はぁぁ……すっごい、先生のせーえき……たくさん出てる♥」

大量の精液を吐き出す肉棒がビクビクと脈打ち、こってりした子種汁を容赦なく彼女の膣内に撒き散らす。勝手に腰が震え、射精の勢いも二度目とは思えないほどだった。

カズサが悪戯っぽく笑う。

「ん？ まだ残ってる？」

「カズサ待つて！ 今敏感だか、うああっ！」

ゆるゆると射精直後のペニスを肉褻でしごかれた。尿道どころか睾丸の奥に残っている精液すらも搾りとるつもりか、まるで飲み干すように蠕動する膣褻が絡みついてくる。

「私の中にせくんぶ出しきってね、せくんせっ♥」

「う、はああ……」

どくつ、どくつと吐精するペニスの痙攣が止まらない。彼女がようやく脈動の治まった肉棒を引き抜くと、自分でも驚くほど濃厚な白濁液が膣口から溢れてきた。

「……いっぱい射精したね、先生♥ そんなに気持ちよかった？」

「うん。とつても……」

射精後の倦怠感を上回る絶頂の余韻に浸りながら、私はカズサを抱きしめた。温もりと鼓動が心地よくて、彼女の存在そのものが愛おしくてしょうがない。

カズサは私の頭を優しく撫でてくれた。

「先生、意外と甘えん坊だよね」

「ごめん……」

「いいよ別に。こういうの、私も嫌いじゃないからさ」

彼女の優しさに感謝しつつも、私は今日もやってしまったと頭を抱える。

——教師と生徒の関係なんて忘れろ。そんな悪魔の誘惑にまた負けてしまった。  
(う、うーん……本当にどうしよう……)

この同棲生活が始まって約二週間。この状況を收拾する妙案は一向に浮かばない。  
カズサが思い出したように尋ねてきた。

「先生、まだ夕飯食べてないよね？」

「ん？　そうだけど？」

「今日はあり合わせで作ったから、あんまり自信ないんだけど……」

彼女はあまり自分を表に出さないが、心根は優しく素直な良い子だ。ゆったりとした静かな性格である一方で、ちよつとばかり相手の反応を気にしすぎる生徒でもある。

「カズサの料理なら大歓迎だよ。どれも美味しいからね」

「そ、そう？　まあ、それならいいんだけど……」

何気ない様子を装いながらも、彼女の頬は嬉しそうに緩んでいた。

カズサといっしょに過ごす日々は、いつも温かくて幸福感に満ちている。

教師と生徒の一線を超えた同棲生活。ほんの少し前までは考えられなかった幸せ……。

その関係の切っかけは、いつものように仕事を手伝いに来た彼女と、あるカフェに行く約束をしたことからだった。

## 第二話 ヌガーのような恋をして 前編

1

夜、私はトイレに入るなり溜息をついた。

カズサと一緒に暮らし始めて今日で四日目。仕事は相変わらず忙しいが、彼女のいる日々にも慣れて、私の生活水準は以前よりも遙かに良くなった。

部屋が常に綺麗に保たれ、洗濯物は溜まらず、食生活の質も飛躍的に向上した。

味や品数はもちろん、彼女の手料理は栄養バランスや彩りも考えられている。おかげで最近では身体の調子も良くなり、今では毎日の献立が楽しみになっていた。

特に、彼女の手作りデザートはどれも美味しい。

カズサも私に「美味しい」と言われるのが嬉しいのか、最近ではスマートフォンを片手に試行錯誤を繰り返しながら、少しずつレパートリーを増やしていつている。

そんな穏やかな同棲生活で、唯一の悩みが自分の「性欲」だった。

相手が大切な生徒だとわかっていても、男の哀しい性と言うべきか、彼女の胸やお尻が目がいつてしまう。最近ではスキンシップも多く、ますます意識することが多くなった。



だから間違いを起こす前に処理しよう、と今に至っていた。

ズボンごとパンツを下ろして便座に腰かけた。さっき彼女の襟元から覗いた胸の谷間を見たせいでろう。すっかり勃起したペニス、どくんどくと脈打っている。

(我ながら堪え性がないなあ……)

手早く済ませようと握ったペニスを上下にしごき始める。

すると唐突にドアが開き、入ろうとしたカズサと目が合った。

「えっ?」

彼女の視線が私の握ったペニスに向けられる。それから状況を理解したのか、みるみる真っ赤になっていく顔でうろたえた。

「これは、えっと、わざとじゃなくて……! っていうか先生、鍵くらいかけて!」

「ご、ごめん! すぐ出るから!」

大慌てでズボンをずり上げ、トイレから出て行こうとしたときだった。

私の左腕を掴んだ彼女に引き留められる。

「カズサ?」

「……ごめん、先生。さっき自分でしてたんだよね?」

「な、何のこと?」

「誤魔化さなくていいよ。ネットで男の人がするの見たことあるし……」

恥ずかしそうに目を逸らしながら、彼女が申し訳なさを湛えた表情で訊いてくる。

「ずっと我慢してたんだよね？ その、やっぱり私のせい？」

「それは……」

本人を前に肯定するわけにもいかず、かといって否定することもできない。

返答に困っていると、カズサがちよっぴり嬉しそうな顔した。

「……そっか。先生、私をそんな風に見てるんだ」

「本当にごめんなさい」

「謝らなくていいよ。先生、その……私が手伝ってあげよっか？」

私は思わず自分の耳を疑った。

「えっと、カズサ？ 手伝うって何を？」

「さっきの続きだけど？ 先生のごこ、まだ大きいままだし……」

中途半端な刺激で止められたペニスは、己の欲求不満を主張するようにズボンの股間でテントを張っていた。彼女の手がズボンの上から優しくさすってくる。

教育者の理想像と雄の本能がせめぎ合う。断らなければと思っているけれど――。

葛藤する私を見かねたのか、カズサが耳元でささやく。

「我慢しないで、先生。私がいっぱい気持ちよくしてあげる♥」

とろけるような甘い声。美少女のそんな誘惑に勝てるはずがなく……。

「……お、お願いします」

本能に抗うことは難しく、私は自分の欲望を受け入れた。

「おっけ。それじゃこっちに来て」

カズサは私の手を引いてリビングへと移動する。

私をソファに座らせると、彼女は脱ぎかけのズボンに触れた。

「えっと、脱がすよ？ 先生」

改めてとなると恥ずかしいらしく、カズサは私に断りを入れてから、恐る恐るといった手つきで、私のズボンと一緒にパンツを下ろした。

狭い場所に閉じ込められていた肉棒が、ぴんつと揺れて跳ね起きる。

彼女は目を丸くさせ、興味津々といった様子で訊いてきた。

「さっき見たときも思ったけど……男の人って、誰でもこんなに大きくなるの？」

「たぶん。どこか変かな？」

「別に変じゃないけど……何て言うか、その、ネットで見たのより大きいかも……」

ネットで何を見たかはさておき、驚かせるだけのインパクトはあったらしい。ほとんど鼻先がくつつきそうなほどの距離から、まじまじとペニスを観察される。

物凄く恥ずかしいものの、教え子とイケナイことをしている興奮のほうが大きかった。

「えーっと、た……確かこうやって……」

カズサが肉棒を真上から見下ろし、口角をもごもごと動かした。

「ん、あ——」

小さく口を開けて舌先を突き出す。とろりと伝う唾液で亀頭を濡らし、唇についた細い糸のような唾を舐めとる。艶めかしい舌の動きに興奮した肉棒がますます硬くなる。

カズサは私の左隣に座ると、ぽんと自分の膝上を示した。

「先生、こっちに寝転んで。膝枕してあげるから」

私は言われるがまま、仰向けとなり柔らかい膝に頭をのせる。カズサの呼吸に合わせて、真っ白な制服に包まれた双丘が、私の視界でゆったりと上下に揺れていた。

彼女が細い指で雄茎を握り、

「その、とりあえずやってみるけど……痛かったら言って、先生」

慎重にその手を上下に動かし始めた。

「こうやって、おちんちんを優しくシコシコって擦れば……」

カズサの手がぎこちなく肉棒をしごいてくる。

刺激そのものは大きくないが、美少女の生徒に手コキをされているという現実だけで、私の興奮は爆発しそうなほど高まっていた。

「うあっ……」

「大丈夫？ こうして欲しいとかあったら、遠慮なく言って」

わかったと頷きを返すも、私はこの状況に耐えるだけで精一杯だった。

カズサはそのまま緩やかな手コキを続けていく。

「……先生のおちんちん、すごい硬くて、熱い。気持ちいいの？」

「うん。気持ちいい……」

ぬるぬるの唾液がローションの役割を果たし、肉棒を擦る手の動きを滑らかにする。

だんだん慣れてきたのだろう。始めこそぎこちなかった手つきが、徐々にコツを掴んで動作に緩急をつけるようになってきた。

「シコシコ、シコシコっ」 声、我慢しなくていいよ。ここには私しかないから」

「あっ、くっ……」

久々に味わう快楽はあまりに気持ちよすぎた。手コキの往復に合わせて、腰が小刻みに震えてしまう。ねっとり絡みつく指が、搾るような回転を加えながら擦ってきた。

くちゆくちゆく淫猥な音が響くたび、溜め込んだ性欲をあおられる。

「そうだ。先生、こういうのはどう？」

彼女の指先がつーっと裏筋をなぞった。さらに親指と人差し指で輪っかを作り、亀頭と竿を同時にしごく。カリ首を指輪っかで擦られると、背筋にゾクゾクした快感が走る。

「あ、うう……きもち、いい……」

「先っぽからなんか溢れてきた。これ、我慢汁ってやつ？」

鈴口から垂れたカウパーが、彼女の唾と混じり合ってより手コキをスムーズにする。

「先生？　ぬるぬるのおちんちん、シコシコされて気持ちいい？　ほら、どんどん先生のえっちなお汁が出てくる。私がするのと自分でするの、どっちが気持ちいい？」

教え子の口から淫語が出るたび、背徳的な興奮を覚えて快感が倍增する。

カズサが答えをねだるように、手のひらで亀頭を撫で回した。

「教えて、先生。どっちがいいの？」

「ああっ！　待つ、そっちは敏感だから……！」

今までより強い刺激にさらされる。手のひらがちよつと動くだけで、もどかしい快樂の波が腰の奥まで響いてきた。勝手に両足が震え、肉棒全体が痺れて気持ちいい……。

「くっ、それはもちろん……カズサだよ……」

カズサが嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、特別サービスしてあげようかな♥」

制服の裾を捲り上げ、白い下着を着けた胸を露わにする。背中に回した両手でホックを外すと、私の目の前でたわわな果実がぶるんっ、と揺れながら小さく跳ねた。

(……これがカズサの生おっぱい)

きめ細かい雪肌の乳房が、彼女の呼吸に合わせて震えている。たぶん彼女は着痩せするタイプだろう。大きすぎず、かといって小さくもない魅惑の美しいおっぱいだ。

「もう、先生ガン見しすぎ……まあ、いつも見てるの知ってたけどさ」

「え……」

「バレてないと思ってた？」

カズサがぼんぼんと優しく頭を撫でてくれる。

「先生の好きにしていよいよ。いつも頑張ってるご褒美ってことで」

ごくりと生睡を飲み込む。ここまでされたら我慢などできるはずもない。

私は引き寄せられるように柔肌へ両手を伸ばす。

「んっ……」

指先がふにゅつと乳房に沈む。力を入れないようにしながら揉みしだく。

「んあっ… あっ、せんせっ……っ」

やはり恥ずかしさはあるのだろう。カズサは悩ましい吐息を漏らしながら、袖で口元を隠して小さく喘ぐ。そんな姿が可愛すぎて、私は彼女の胸に顔を埋めて抱きしめる。

「ん、先生……たくさん甘えて… 今は好きなだけこうしていいから」

「カズサ……」

彼女の優しさと母性が愛おしい。むにゅと形を変える柔肉は、私の動きに合わせて顔を包み込んでくれる。このままずっと挟まれていたい。そう思えるほど心地よかった。

私はその思いを伝えるように、夢中でおっぱいを揉んでいた。

「んっ、ふあっ● あっ、ああ……先生、もつと、んうっ……」

ぷっくり膨らむ乳首に触れると、カズサの身体がびくんと跳ねる。

右手の指先で乳頭を転がし、私は本能に従って左の乳房へ吸いついた。

「あ、んっ● んくうっ、せんせっ● んんっ、そこ、そんな強く吸われたらあ……●」

乳首の先っぽを舌先で舐ると、カズサの口から悩ましい吐息と喘ぎ声が漏れる。

甘えるような艶っぽい嬌声。そんな声を聞いたら興奮が止まらない。

「ふああっ！ んあっ、ああっ● そんなせえ……●」

むしろぶりついた乳輪ごと吸い上げ、すでに勃起した乳首を甘噛みした。

「ひゃうんっ● あ、やつ、ダメっ● そこ敏感だから噛んじゃ、んああっ●」

弓なりに背中をのけ反らせ、カズサが両肩を小さく震わせる。

恍惚とした表情で私の頭を引き離した。

「先生、ちよつとストップ……今日は私がしてあげたいから」

そう言って、彼女は指を再び肉棒に絡めてゆるゆるとしごき始める。

「こうやっておちんちん、いっぱいシコシコして気持ちよくしてあげる●」

スリスリとさつきより早めのストロークで擦り上げた。血管の浮いた幹を揉むように、五本の指が丹念な愛撫を繰り返す。優しい手コキが、私に緩やかな快感を与えた。

そんなカズサの動きに合わせ、たゆんとおっぱいが揺れる。



「ん、おっぱいも？ ふふっ、いいよ♪ たくさん甘えて、せんせっ♪」

彼女のお許しが出たところで、私は魅惑のおっぱいにむしゃぶりついた。弾力のある乳首をついばみ、飴玉を舐めるように舌上で転がす。

「ひうっ♪ あんっ、せんせっ……それ、かなりきもちいい……♪」

そう言いながら、ペニスをちよつと強めに握って素早く擦ってきた。細い指がカリ裏に引っかけり、リズムカルにしごかれるたび、得も言われぬ快感を与えられる。

授乳手コキは、私に不思議な興奮をもたらしていった。

たぶんカズサも同じなのだろう。母性に満ちた表情で私の頭を撫でる。

「ふふっ、そんなにちゅうちゅう吸って……♪ こっちも撫でてあげるね」

彼女が手のひらで亀頭を愛撫する。我慢汁がくちゆくちゆと音を立て、さっきとは違う刺激をもたらす。カズサはマッサージするように手のひらをゆっくりと動かした。

「溜まってるせーし、いつでも出していいよ♪ ぴゅっっって射精してっ♪」

気持ち良さで多幸福感に包まれて、頭がぼーっとしてきた。

そんな私を甘やかすように、カズサは優しい瞳で見つめてくる。

「先生、おちんちんの先っぽ膨らんできたね……♪ そろそろ？」

「うん……」

「おっけ。じゃ、気持ちいい射精しよっか♪」

彼女が素早く雄茎を擦り上げた。さらに手首をひねって回転を加えてくる。

ただ擦られるよりも格段に気持ちいい動きが、私をどんどん追い詰める。

「あつ、んああつ。先生のおちんちん、さつきよりも硬くなってる……」

私はカズサの乳首を夢中で吸った。乳輪ごとグミのような弾力の乳首を食む。

「ん、あんっ……先生の身体、びくびくって震えてる。もう本当にイきそうなんだ……

うん、いいよ。おっぱいに甘えながら、気持ちいい射精しちやおう？」

彼女の優しい声に安心する。愛情たっぷりの心地いい授乳手コキ。ふかふかおっぱいに

包まれながら、彼女の温もりに身も心も委ねて、溜め込んだ欲望を吐き出したい。

睾丸の奥からぐつぐつと煮えたぎる快感がせり上がってきた。

「んっ……んんっ……先生、ほら我慢しないで。溜め込んでるどろどろのせーし、

私のおっぱいに甘えながら出して。白いおちんちんミルク、ぜんぶ射精してっ」

授乳手コキで高められた肉棒を、彼女の手が素早く往復してラストスパートをかけた。

止めようのない射精衝動がむくむくと湧いてくる。

「大好きだよ。せんせっ」

愛おしさと射精感が最高潮に達する。私は快感に身を委ねて大量に吐精した。

——どびゆるっ！ どびゆるるうっ！ どぶどぶっ、どびゅっ！ びゆるるうっ！



こつてりした精液が噴出する様子に、カズサは目を瞬かせる。

「……………すごいね、こんなに出るんだ」

脈動する肉棒をしがかれながら、どろどろの白濁液を何度も吐き出す。それでも射精の勢いはなかなか止まらず、彼女のおっぱいや腕にまでゼリーののような飛沫が撥ねた。

カズサは最後の一滴まで搾り出すように、緩やかな手コキを続ける。

「先生？ 満足できた？」

「うん。とつても……………」

快楽の余韻で恍惚とする私は、ふわふわした多幸福感で心が満たされていた。

正直、自分でするよりも遙かに気持ちいい射精だった。

カズサが指先についた精液を口に含む。

「ん、ちゆるっ……………ちよつとしょっぱいけど、嫌いじゃないかな」

自分の欲望を舐めとる姿に、私は背徳的な興奮と同時に申し訳なさを覚えた。

「ごめん、カズサ。こんなに汚しちゃって」

「気にしないで。先生が気持ちよかったなら、それでいいって言うか……………」

「ありがとう。すごく気持ちよかったよ」

カズサが気恥ずかしさを誤魔化すように目を逸らす。

「まあ……………それならいいんだけど……………」

何気なさを装う言葉とは裏腹に、猫耳がびくびくと嬉しそうに跳ねていた。

ただ冷静さが戻ってくるにつれて、やらかした事の重大さを痛感する。

(……やってしまった。こうならないように気をつけてたのに)

成り行きとはいえ、教え子に性欲処理をさせるなどあつてはならないことだ。

ユウカや連邦生徒会が知ったら怒られるどころじゃ済まないだろう。

私の心中を知ってか知らずか、彼女がくすつと笑った。

「先生？ 少しは役に立てた？」

「……え？ ああ、うん。もちろん！」

「だったら、これからは素直に言つて。そしたらいつでもシてあげるから」

カズサはそう言つて、私の頭を優しく抱きしめる。

「私は先生の彼女だからね……」

柔らかなおっぱいが顔にむぎゅつと当たつて気持ちいい。

日々の疲れと射精後の倦怠けだるさが押し寄せ、だんだん頭がぼんやりしてきた。良くないとわかつている一方で、包み込まれるような安心感もあつて、気持ち癒やされる。

諸々の問題は明日考えよう。カズサも説得すればわかってくれるはず……。

私はそのまま、微睡みの中へと落ちていくのだった。